

人材育成におけるスタディツアー（海外体験学習）の役割

— 10年に及ぶスタディツアー事業の事後評価 —

特定非営利活動法人 アジアボランティアセンター

今里 拓哉

目次

1.	受入団体概要及び専門調査員略歴	3
1.1.	アジアボランティアセンターの概要	3
1.2.	専門調査員の略歴	3
2.	調査・研究活動内容	3
2.1.	実施期間	3
2.2.	活動目的及び背景	3
2.2.1.	活動の目的	3
2.2.2.	活動背景	4
2.3.	調査結果	4
2.3.1.	スタディツアーの概略	4
2.3.2.	AVCスタディツアーの概要	4
2.3.3.	アンケート調査結果	5
2.3.4.	ヒアリング調査結果	16
2.4.	分析	19
2.5.	提言	21
3.	所感	22
4.	添付資料	23
4.1.	アンケート用紙	23
5.	参考文献	27
5.1.	スタディツアー関連書籍	27
5.2.	スタディツアー関連論文	27

1. 受入団体概要及び専門調査員略歴

1.1. アジアボランティアセンターの概要

特定非営利活動法人アジアボランティアセンター（以下、AVC）は、「途上国のNGO¹とのネットワークを生かし、草の根レベルの人材育成と相互理解促進のための事業を行うこと。また、その事業を通して環境の保全と平和、さらにはアジア・太平洋地域の持続的な発展に寄与すること」を目的に1996年10月、大阪に設立された。以来、途上国でなぜ、草の根の人々が貧しくなっていくのか、その構造的問題を地域の視点から見据えている。急激なグローバル化の進展に伴い、富める国と貧しい国との格差は益々拡大し、一方、国内においても一人ひとりの人格や人権が軽く扱われ、人の命の尊さが顧みられない。このような病める世界にきちんと向き合い、とくに若い人たちに人の命を大切にする豊かな心を育み、そして人が人を傷ついたり、抑圧したり、差別することのない平和で民主的な社会を築きたい、そんな願いを込めて活動している。主な活動内容はスタディツアーをはじめ、語学講座、国際協力活動に関するワークショップやセミナーの開催のほか、関係国やフェアトレードを扱うボランティアグループの活動を推進している。

1.2. 専門調査員の略歴

大学卒業後、中高一貫私立学校の社会科教諭として勤務。3年にわたり地理学、日本史、世界史などの教科を担当。2003年よりネパール国立トリブヴァン大学村落開発学科修士課程入学。研究テーマは「スタディツアーによる受入側へのインパクト」。在学中にAVCのネパール・スタディツアーを現地ボランティアスタッフとして迎える。訪問団体との事前準備、コーディネーターの補助、参加者のケア等を担当。2006年に帰国後、NGO専門調査員²としてAVCに配属される。

2. 調査・研究活動内容

2.1. 実施期間

本調査は、2006年5月1日から2007年3月31日の期間で行われた。

2.2. 活動目的及び背景

2.2.1. 活動の目的

AVCがボランティア育成のためのツールとして10年間用いてきたスタディツアーが「ボランティア」「国際協力」の担い手を育成するというねらいをどれくらい達成したかを分析・評価すること。この調査を通じて、今後増加していくと予想される日本のNGOによるスタディツアーについて、現在の方法論を評価・分析するとともに、今後より効果のあるスタディツアー実施に向けて提言することを目的とする。

¹ Non-Governmental Organizationの略称。非政府組織。政府から自立した組織として、一般市民が国境と国籍の違いを乗り越え、自発的に参加・運営する草の根の国際協力・交流団体のこと。

² 外務省がNGOのキャパシティ・ビルディングを目的として1999年から導入した「外務省NGO活動環境整備支援事業」の一環で、国際協力活動に関する専門性や技術を有する人材を、特定分野・業務の強化を望むNGO団体に派遣し、一定期間特定の業務に携わることにより、当該団体が抱える課題に関して提言を行うことを目的としている。

2.2.2. 活動背景

調査の背景として、これまで AVC はスタディツアー事業の事後評価を十分に行っていなかった反省がある。事後評価の必要性はスタッフの誰しもが感じてはいたが、そこまで手が回らないのが現状であった。そこで今年は設立 10 年目ということもあり、これを機に今まで実施してきたスタディツアーの総合的な調査に踏み出すに至った。

2.3. 調査結果

2.3.1. スタディツアーの概略

スタディツアー研究会³はスタディツアーを次のように定義している。

『「国際協力・交流市民団体（NGO）などが相互理解や体験学習を目的として行うツアー」をさし、観光のみの旅行とは異なり「現地事情や、NGO の活動などを学習できる」「現地の団体や人々と、同じ目の高さで交流できる」「参加者自ら、プログラムに参加、協力できる」という特徴を持つ。見学・視察中心のものを「スタディツアー」、植林など作業が中心のものを「ワークキャンプ」と呼ぶことが多い』（1997 スタディツアー研究会）

1980 年代初頭から日本の NGO が、スタッフやその団体を支援している会員などの関係者を対象とした身内のツアーとしてスタディツアーは始まった。会員としては自分が支援している団体の現地プロジェクトの様子を報告書や報告会だけでなく、自ら現場視察することを望むようになった。また企画団体としても、会員に現地プロジェクトをより理解してもらい、持続的な支援を得るためにスタディツアーを実施するようになった。つまりスタディツアーの発端は、NGO とその支援者双方のニーズがうまく合った結果生まれた、NGO の現地プロジェクト視察ツアーであったと言える。

2.3.2. AVC スタディツアーの概要

AVC の海外体験学習事業は大きく二つに分類できる。一つ目は「海外体験学習プログラム—スタディツアー・ワークキャンプ」という名称で参加者を一般応募して募るものである。これは AVC が企画し、旅行代理業者が主催して実施する。二つ目は「特定プロジェクト」として、他団体が主催するツアーを AVC がコーディネートするものである。これらの団体の多くは企業や労働組合、高校や大学などの教育機関、自治体などである。前者に関して AVC はこの 10 年の間にインド、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ベトナム、マーシャル諸島、マレーシア、モンゴル、などの国々で実施してきた。後者は、毎年実施する高校の研修旅行をコーディネートするものや、期間限定で労働組合が主催するスタディツアーをコーディネートするなど、実施形態はそれぞれ異なる。

他団体が企画する多くのスタディツアーと比較すると、AVC スタディツアーには特徴的な点がある。AVC はすでにその地域の人々が、自らの課題解決のために取り組んでいる NGO と協力関係を結びながら、スタディツアーをはじめ、草の根の支援事業を展開している。その中で特に気をつけていることは、援助する、援助されるという関係性をつくらず、対等な関係性を大切にしながら事業を展開している。そ

³ スタディツアー研究会・・・スタディツアーの質的向上を目的として、NGO・国際交流団体・旅行会社等を中心に 1997 年に結成され、研究集会の実施やスタディツアーの広報などを行っている。

してその関係性の中でスタディツアーが行われている。AVC はアジア太平洋地域の NGO とのネットワーク活かし、その中でも特に優れた取り組みを実施し、AVC との付き合いも長く、互いに信頼関係を持つ団体をカウンターパート NGO として、スタディツアーの受入をお願いしている。つまり AVC スタディツアーでは AVC の取り組みを学びに行くのではなく、AVC と対等なパートナー関係を持つ現地 NGO の取り組みを学ぶ。

AVC 代表平田哲氏はスタディツアーを次のように語る。

「スタディツアーの実施目的は人材育成。そしてそのキーワードは現場（フィールド）。参加者が現地の NGO からその活動を通じて学ばせてもらう現場体験学習が AVC スタディツアーである。最初のステップとしてまず現場を知ることが大事である。現地の状況や課題を知り、その原因や背景にある歴史を知る。そして貧困や様々な問題について考え、分析する。次に現地の人々との交流が大切。そのために少しでも現地の言葉を勉強し、現場でコミュニケーションを図る。交流することにより、その現場が抱える課題解決に自分も関わる気持ちが生まれる。最終的にはボランティアや国際協力という形で関わることを願う。ただ参加者全員が国際協力に直接関わることを期待しているわけではない。スタディツアー経験はどこで花咲くかわからない。各々が所属する社会でスタディツアーの経験を活かしてくれたらと思う。」

2.3.3. アンケート調査結果

本調査は「海外体験学習－スタディツアー・ワークキャンプ」の内、AVCが継続的に実施しているインド、ネパール、バングラデシュ、マーシャル、マレーシアの5カ国のスタディツアーを調査対象とする。調査方法として、アンケート調査⁴とヒアリング調査を実施した。

調査対象であるスタディツアーの実施回数・参加者延べ数を記したのが次の表である。合計 58 回のスタディツアーの参加者のべ数が 610 名である。

	ツアー開催数	参加者延べ数	平均参加者数
インド	10	135	13.5
ネパール	15	185	12.3
バングラデシュ	10	57	5.7
マーシャル	8	71	8.9
マレーシア	15	162	10.8
合計	58	610	10.5

調査対象であるスタディツアーに参加した延べ 610 名の内、現住所を把握している 463 名に郵送法でアンケート調査を実施した。次の表でわかるように、回答者数は合計 127 名で 27.4%の回収率であった。なお、AVC スタディツアーに複数回参加した人に対してもアンケートは一部しか送っていない。そのような「リピーター」のアンケート回答は別分類し、彼らが参加した個々の国別ツアーの回答者数には反映されていない。

ツアーを実施した国別に回収率をみると、どの国も約 20%から 30%であった。しかし、リピーター

⁴ 添付資料「アンケート用紙」参照。

のアンケート回収率だけは 63.2%と飛びぬけて高い。これはリピーターがスタディツアーへの参加だけに関心があるのではなく、本アンケート調査のような AVC の活動や業務に対しても、一回限りの参加者に比べて協力的であることが伺える。

	発送数	回答者数	%
インド	92	18	19.6%
ネパール	147	44	29.9%
バングラ	41	11	26.8%
マレーシア	119	32	26.9%
マーシャル	45	10	22.2%
リピーター	19	12	63.2%
合計	463	127	27.4%

このアンケートは参加者がスタディツアーに参加する前と後の所属や関心事やボランティア・国際協力への関心の有無を比較する。そして参加後にどれだけの意識変容があったか、ツアー経験がどれだけ活かされたのか、ボランティア・国際協力の担い手育成として成果があったかなどを探ることも目的としている。

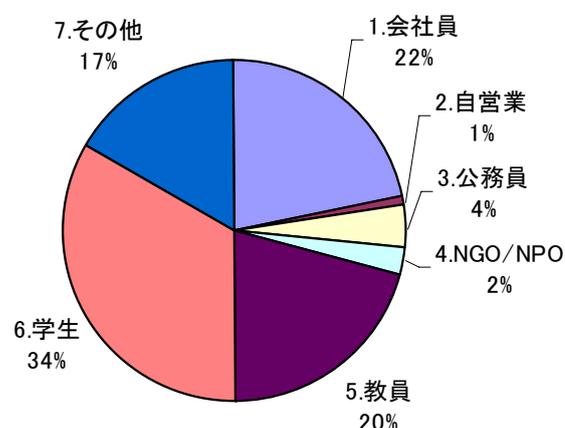
以下、アンケート調査の結果を一問ずつ見ていくことにする。

問1. スタディツアー参加当時の所属を教えてください。

AVC はスタディツアーの参加者を募集するにあたって、その対象を「テーマに関心のある方」としか定めておらず、年齢や職業はもちろんのこと専門的な知識や経験、語学力などを問わない。よって多様な人が申し込み、参加する。

アンケート回答者の参加当時の所属とその割合を示しているのが次の表である。やはり長期休暇がある学生が 34%と最も多い。続いて会社員が 22%、教員が 20%であった。「その他」と答えた 17%のうち、約半分は退職あるいは休職中と答えている。なお、これはアンケートに回答した参加者の数値であり、実際に AVC スタディツアーの参加者は学生が約 50%を占める（ネパールツアーは学生 45%、サラワクツアーは学生 59%）。学生は大学卒業後に転居する場合が多く、アンケートを郵送しても住所不明でその多くが返却されたため、アンケート回答率が低かったと考えられる。

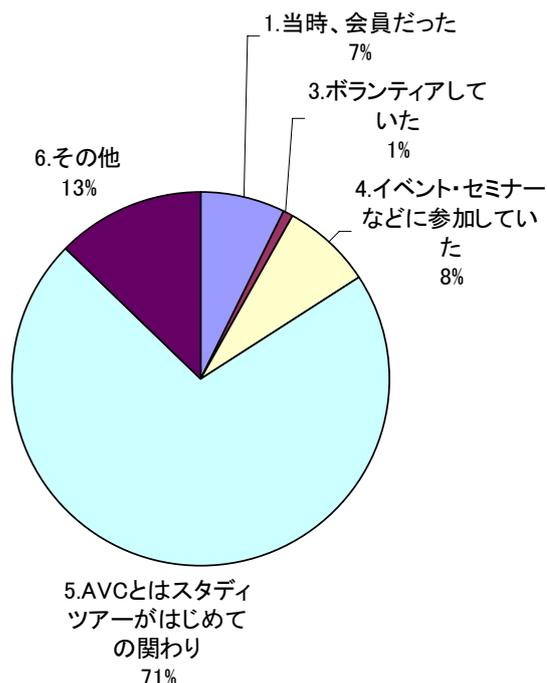
問1. スタディツアー参加当時の所属	集計
1. 会社員	28
2. 自営業	1
3. 公務員	5
4. NGO/NPO	3
5. 教員	25
6. 学生	44
7. その他	21
総計	127



問2. スタディツアーへ参加する前からAVCと関わりありましたか？

参加者の71%はスタディツアーがAVCとの初めての関わりであり、以前から何らかの形でかかわりのあった参加者は残りの29%に過ぎない。この事からスタディツアー参加者の多くはAVCに関わった経験からスタディツアーに申込みのではなく、多くの場合はスタディツアーへの参加をきっかけにAVCとかかわりを持つことが伺える。「その他」の回答の中には「1. から 4. のすべて」とAVCに大変よくコミットしている方や、「大学でAVCスタッフの講義を受けた」などがあった。

問2. スタディツアー参加前のAVCとの関わり	集計
1. 当時、会員だった	9
2. 当時、語学講座を受講していた	0
3. ボランティアしていた	1
4. イベント・セミナーなどに参加していた	10
5. AVCとはスタディツアーが初めての関わり	90
6. その他	16
総計	126



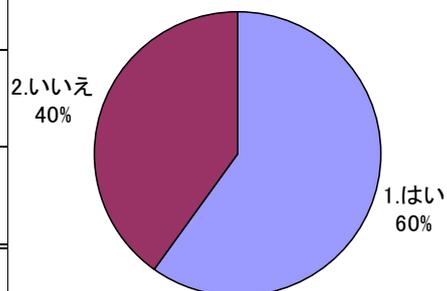
問3. スタディツアー参加以前からボランティア活動や国際協力活動に携わっていましたか？

AVC スタディツアー参加者にとってスタディツアーはボランティアや国際協力活動のための「きっかけ」なのか、あるいはそれらの活動を更に深める「ツール」なのか。アンケート結果を見る限り、参加者の60%はすでにボランティア活動や国際協力活動に携わっている。これはスタディツアーを「きっかけ」や「はじめの一步」として捉えている参加者より、「関心事をより追求したい」や「興味を深めたい」とから申込みの方が若干多いことが伺える。

後に問13の「スタディツアー終了後、ボランティア活動や国際協力活動などに関わっていますか？」との結果をクロス集計⁵し、比較分析することとする。

⁵与えられたデータのうち、2つの項目に着目してデータの分析や集計を行なうこと。

問3. スタディツアー参加以前のボランティアや国際協力活動へ関わり	集計
1. はい	75
2. いいえ	50
総計	125

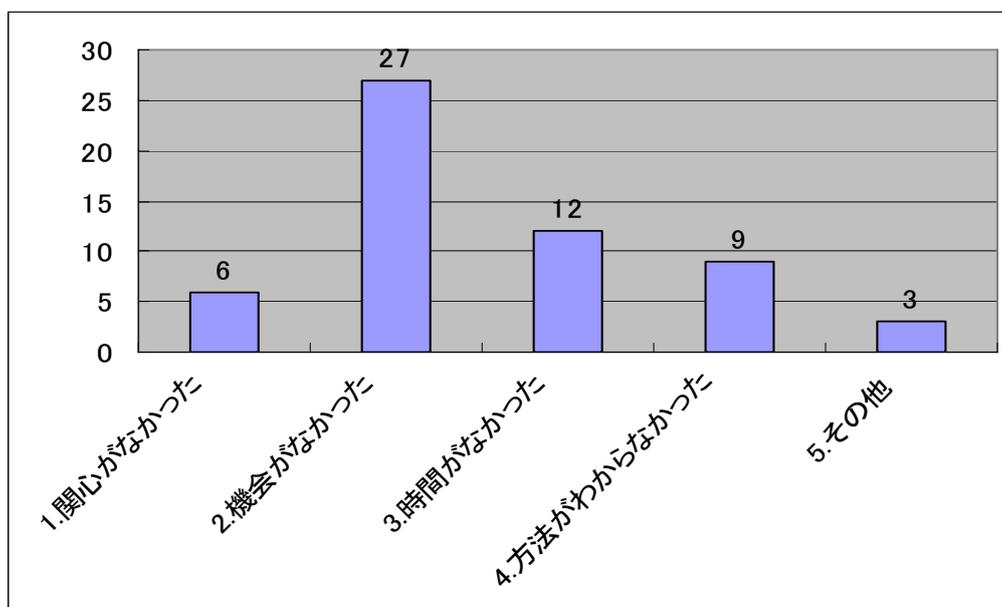


問4. 問3で「1. はい」とお答えになった方は、その活動の具体的な内容をお書きください。

参加者は実に様々な活動を経験した上でスタディツアーに参加している。問3「スタディツアー参加以前からボランティア活動や国際協力活動に携わっていましたか？」の問で「はい」と答えた75人の参加者の答えを「ボランティア」「仕事」「募金」の3つに大きく分類したところ、「ボランティア」82%、「仕事」14%、「募金」4%、とそのほとんどがボランティア活動経験であった。

問5. 問3で「2. いいえ」とお答えになった方は、その当時の理由をお答え下さい。

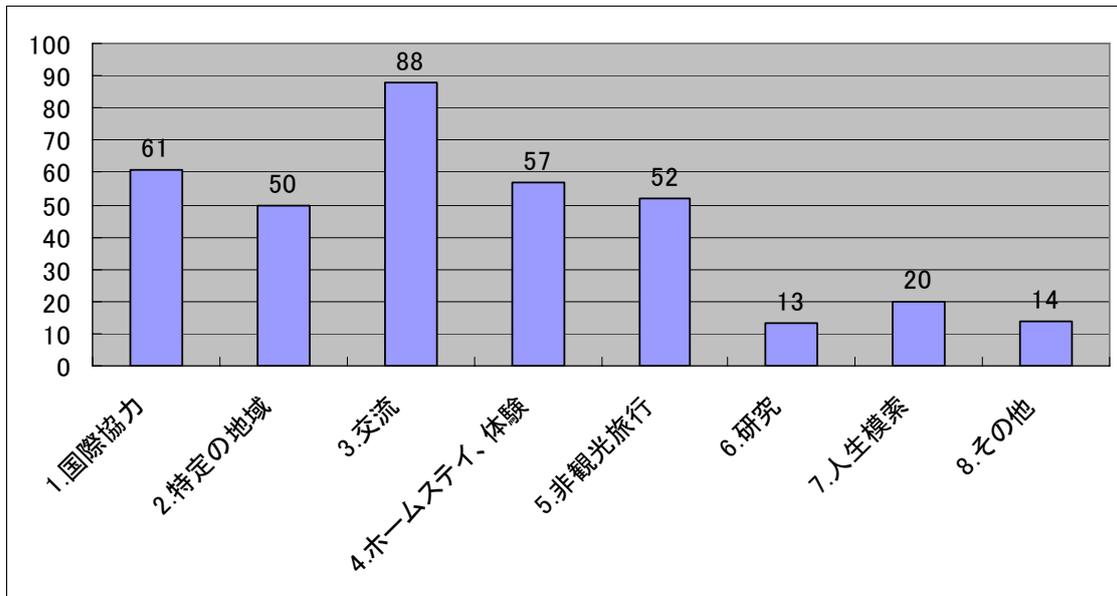
問3の「スタディツアー参加以前からボランティア活動や国際協力活動に携わっていましたか？」という質問に対して「いいえ」と答えた人にその理由を複数回答可で質問したところ、半数近くの答えが「機会がなかった」ともっとも多かった。次に多かった「時間がなかった」は「機会がなかった」の約半分のみである。



問6. スタディツアーに求めていたもの（関心事）は何でしたか？（複数回答可）

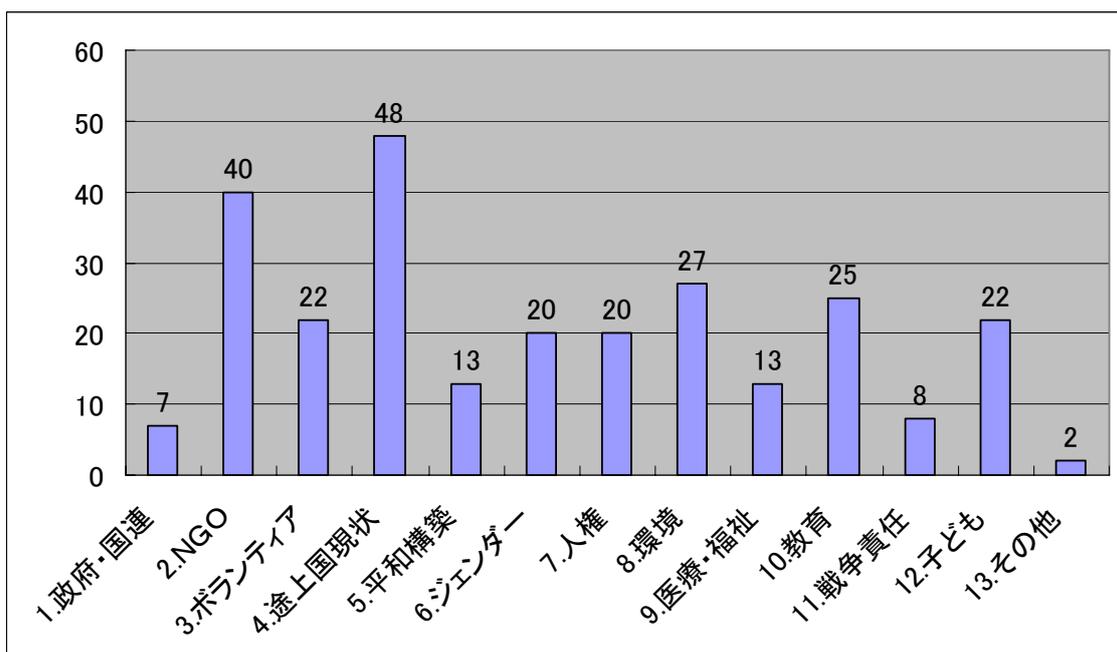
参加者がツアーに対して求めていたものや関心事が何であったかを複数回答で質問した。その結果、

「現地の人々との交流」との答えが 127 人中 88 人（69%）と他の回答に比べて特に多かった。続いて 61 回答（48%）の「国際協力」、57 回答（45%）の「ホームステイなどの異文化体験」、52 回答（41%）の「普通の観光旅行でないこと」、50 回答（39%）のツアーが開催される特定の国や地域」の 4 つがほぼ横這いの結果であった。「大学などの研究や調査、論文」のためや「自分探し、第 2 の人生の模索」のためと答えた人は 10% 台に留まった。



問7. 問6. で「1. 国際協力」とお答えになった方のみ、その具体的な内容をお答え下さい。（複数回答可）

問6 で「国際協力」と答えた 61 人に対して更に興味のある具体的な内容を質問した。多かったのが「途上国の現状を把握」の 48 回答（79%）である。続いて「NGO 活動」の 40 回答（66%）であった。

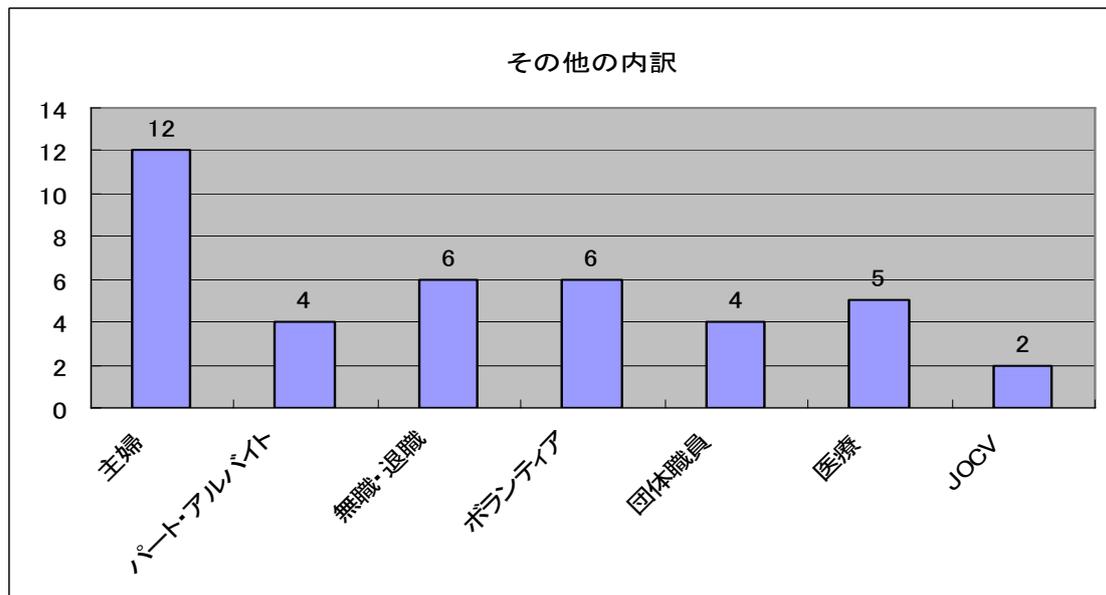
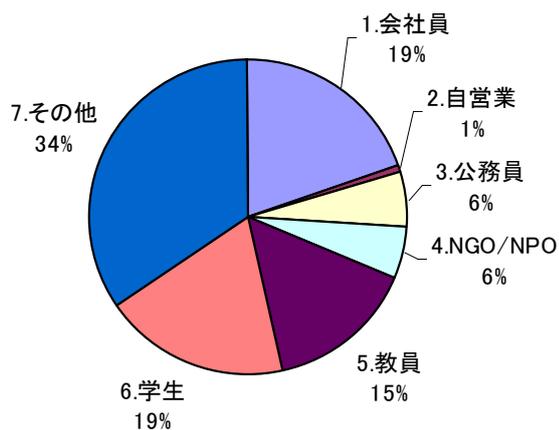


さて、これ以後はスタディツアー参加後のことを質問したアンケート結果をみていく。

問8. 現在の所属を教えてください。

問8ではアンケート回答時の所属を聞いたところ、最も多くの回答があったのが34%の「その他」であり、続いて「会社員」と「学生」が19%であった。

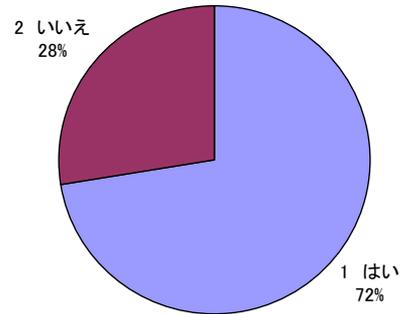
問8. 現在の所属	集計
1. 会社員	25
2. 自営業	1
3. 公務員	7
4. NGO/NPO	7
5. 教員	19
6. 学生	24
7. その他	44
総計	127



問9. 友人・知人にAVCスタディツアーを勧めたことありますか？

AVCスタディツアー参加後にAVCのスタディツアーを友人や知人に勧めたことがあるかを質問したところ、「はい」と答えた方は72%、「いいえ」と答えた方は28%であった。複数のAVCスタディツアーに参加したことのある「リピーター」に関しては100%の割合でお知り合いに紹介してくれている。このことから、ツアー参加者が広報の担い手となっていることが伺える。

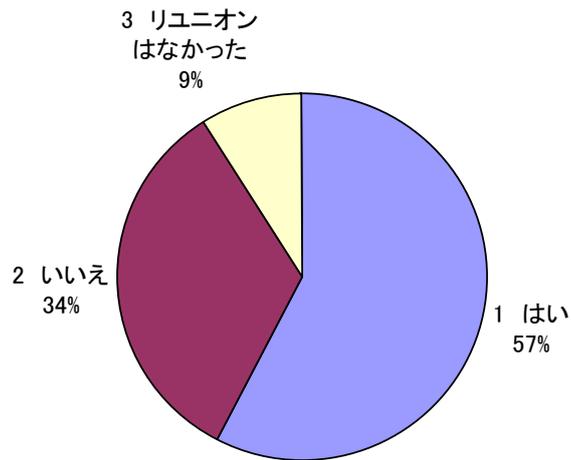
問9. 友人・知人に AVC スタディツアーを勧めたことありますか？	集計
1 はい	
2 いいえ	35
総計	127



問10. ツアー後のリユニオンや写真交換などには参加しましたか？

スタディツアーでの様々な経験を参加者が消化しきるにはある程度時間が必要である。AVC ではスタディツアー終了の数週間後に再び参加メンバーで集まり、リユニオンを行っている。ここでは写真交換や談話するだけでなく、最後の振返り作業を行い、発表しあう。少し日本での日常に戻ることで、ツアー中では感じる事のなかった思いや考え方、または今後の目標などを発見することができる。

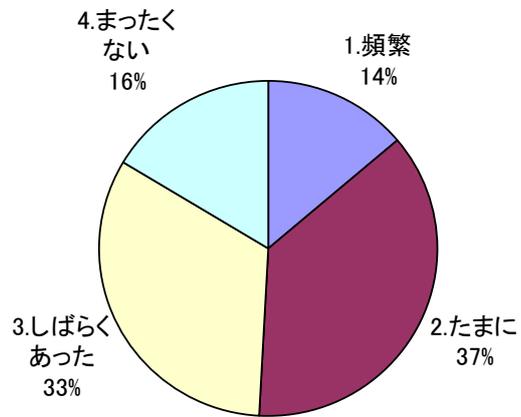
問10. ツアー後のリユニオンや写真交換などには参加しましたか？	集計
1 はい	72
2 いいえ	42
3 リユニオンはなかった	11
総計	125



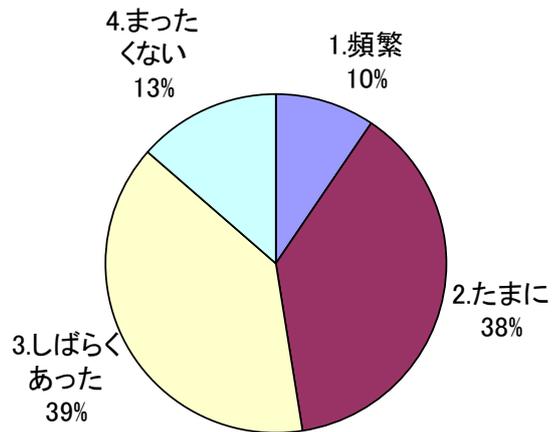
問11. スタディツアーで知り合った人々とツアー後も交流や関わりは続きましたか？

スタディツアーで知り合った4つのアクター（AVC、他の参加者、現地 NGO、現地コミュニティの人々）との交流が、スタディツアー後にどれだけ続いているかを質問した。その結果、AVC との交流は「頻繁」と「たまに」で 51%、他参加者との交流は 48%と、約半数の参加者は日本国内の交流をツアー後も維持し続けている。しかし現地 NGO と現地コミュニティとの交流をツアー後維持している参加者は 13%程度で、多くの参加者にとって現地との交流維持は困難であることが伺える。

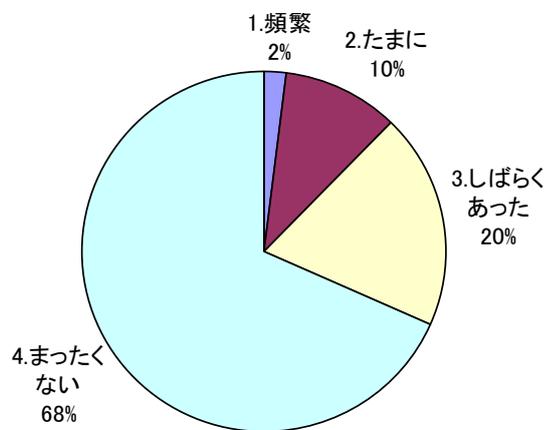
AVC と	
1. 頻繁	16
2. たまに	43
3. しばらくあった	38
4. まったくない	19
小計	116



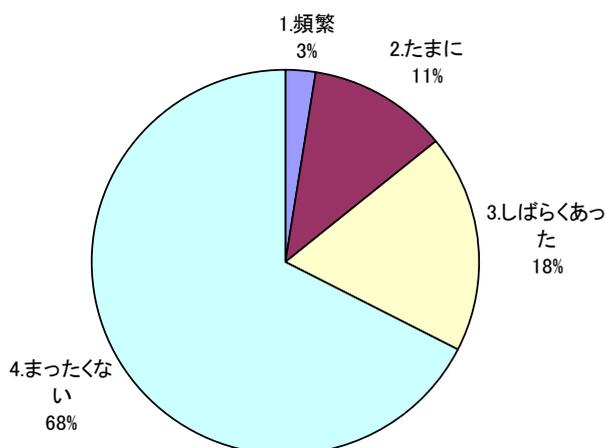
他参加者と	
1. 頻繁	12
2. たまに	48
3. しばらくあった	49
4. まったくない	17
小計	126



現地 NGO と	
1. 頻繁	2
2. たまに	11
3. しばらくあった	21
4. まったくない	73
小計	107

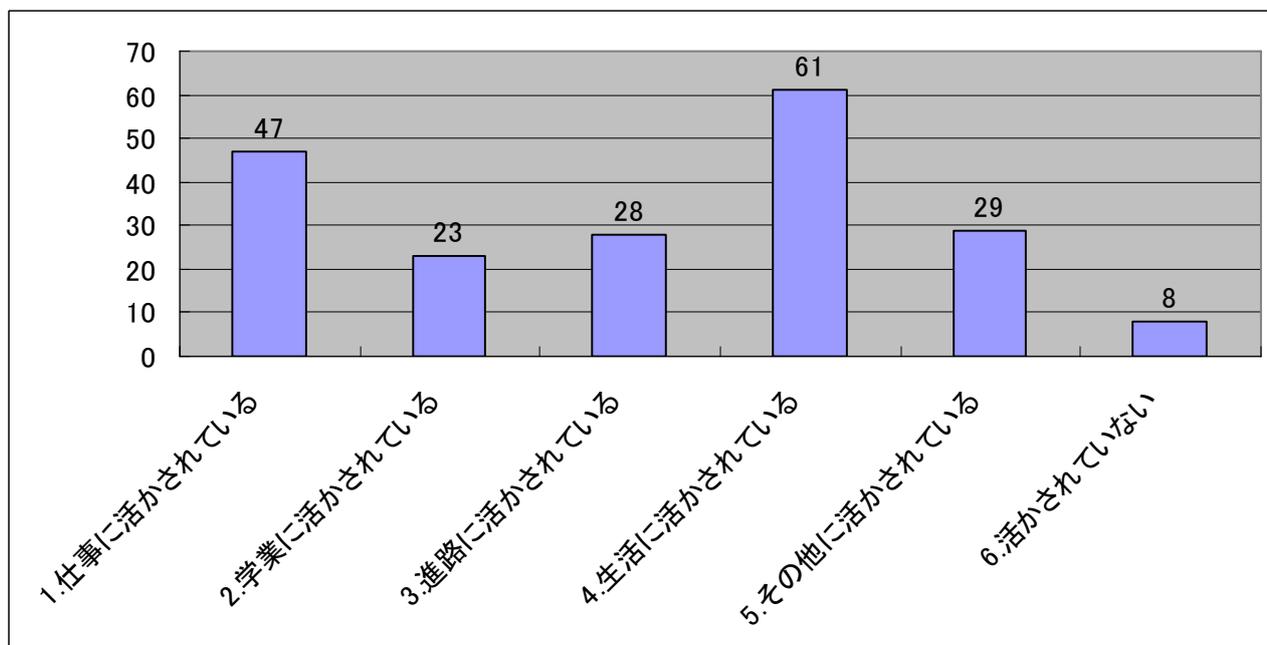


現地コミュニティと	
1. 頻繁	3
2. たまに	13
3. しばらくあった	21
4. まったくない	77
小計	114



問12. スタディツアーを通じて学んだことや体験したことは、その後の生き方や生活に活かされていると感じますか？該当するもの全てお選び、お答えください。

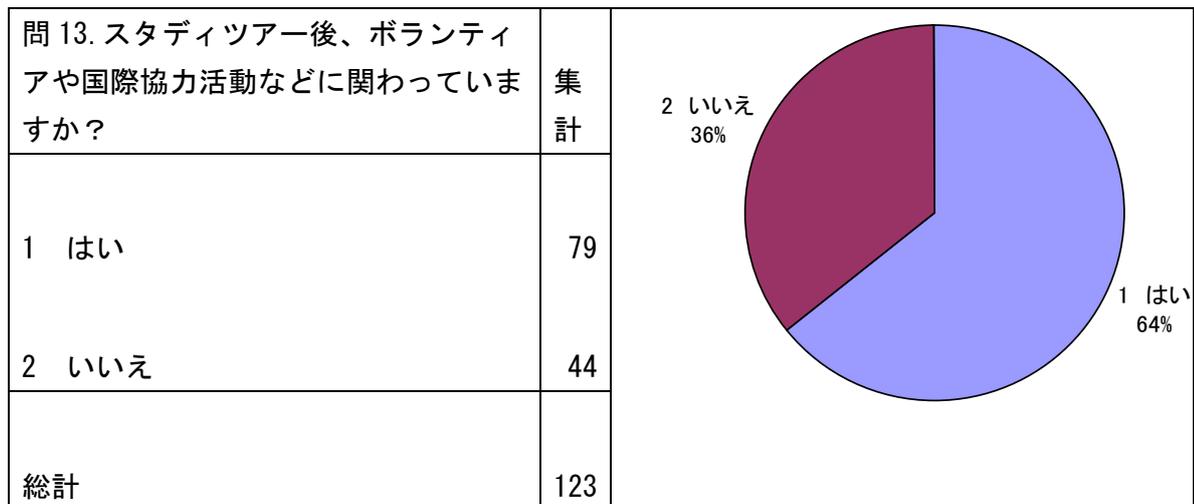
スタディツアーを通じて学んだことや体験したことが、ツアー後どのように活かされているかを質問し、複数回答で答えてもらった。結果、「生活に活かされている」(61人)と答えた方が最も多く、続いて「仕事に活かされている」(47人)が多かった。「学業に活かされている」(23人)「進路に活かされている」(28人)「その他に活かされている」(29人)と答えた方の数はほぼ横這いであった。「活かされていない」と答えた人は8人だけで、これに無回答の5人を合わせると全体の10%となる。つまり90%の参加者にとってスタディツアー経験は何らかの形で活かされていることとなる。



問13. スタディツアー終了後、ボランティア活動や国際協力活動などに関わっていますか？

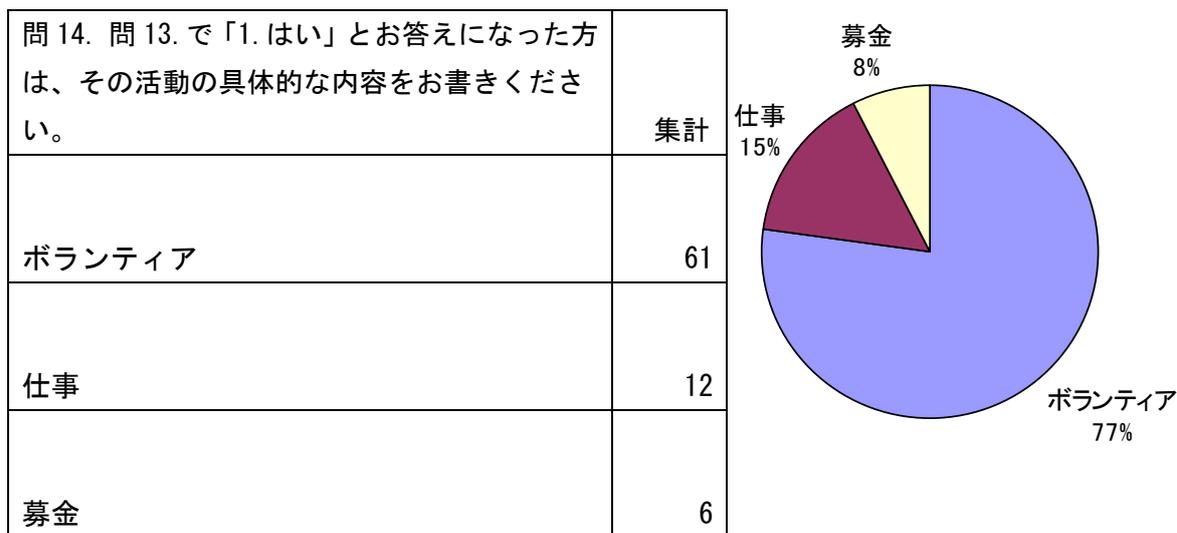
スタディツアー参加後、ボランティアや国際協力活動に携わっている人は全体の64%であった。この

結果に関しては後の「2.4. 分析」で詳しく扱う。



問14. 問 13. で「1. はい」とお答えになった方は、その活動の具体的な内容をお書きください。

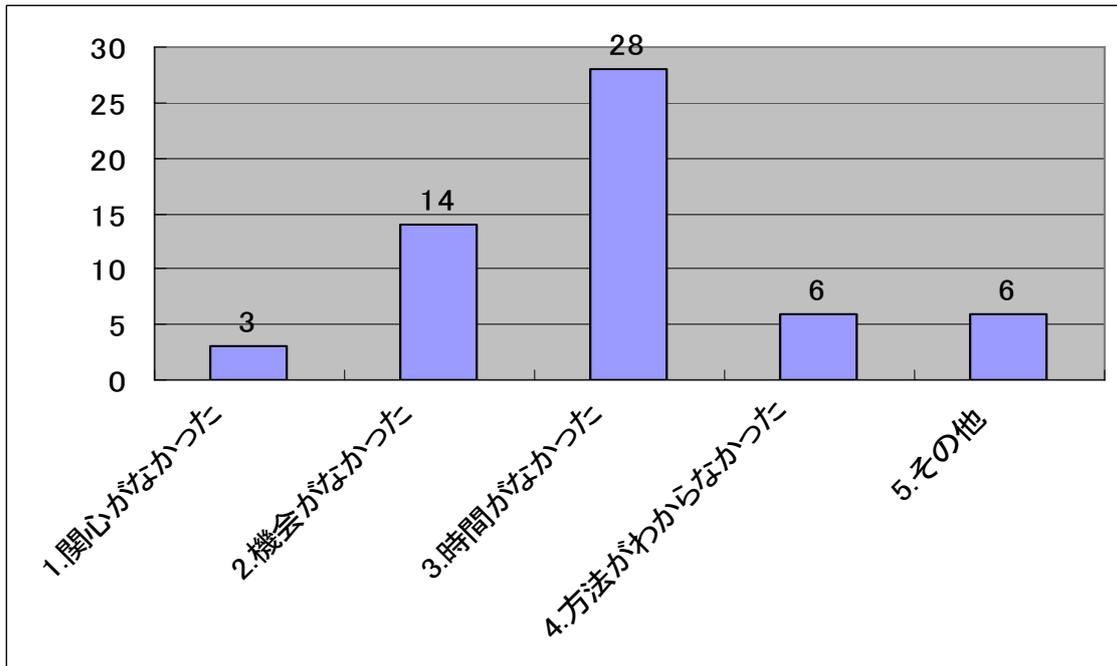
問 4 と同じように、問 13「スタディツアー参加以前からボランティア活動や国際協力活動に携わっていましたか？」の問で「はい」と答えた 79 人の参加者の答えを「ボランティア」「仕事」「募金」の 3 つに大きく分類した。その結果、「ボランティア」77%、「仕事」15%、「募金」8%であった。



問15. 問 13. で「2. いいえ」とお答えになった方は、その理由をお答え下さい。

問 13 の「スタディツアー後にボランティアや国際協力活動などに関わっているかの質問に対して「いいえ」と答えた人にその理由を解いた。その結果、「時間がなかった」と 28 人が答えて圧倒的に多く、続いて 14 人が選んだ「機会がなかった」との答えが「時間がなかった」の約半分であった。

問 5 のスタディツアー参加当時の理由と比較してみると、「機会がなかった」と「時間がなかった」が逆転している。スタディツアーに参加し、何らかの活動を行う機会を得たとしても、日々の生活に追われ行動に移すための時間がないという現実がうかがえる。

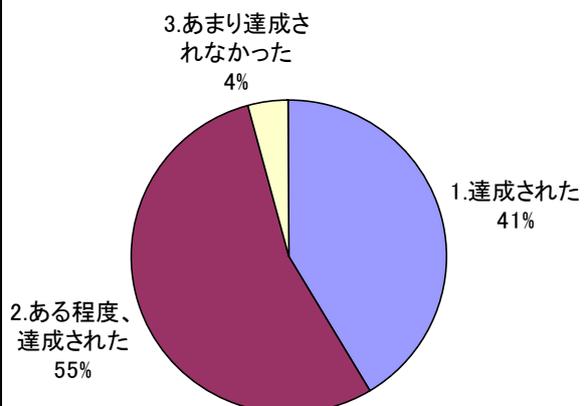


問16. 問 6. や問 7. でお答えになったご自身の関心事はAVCスタディツアーに参加することによって達成されたと思われますか？

スタディツアー参加前の関心事がどれだけ達成されたかを「達成された」「ある程度、達成された」「あまり達成されなかった」「まったく達成されなかった」の4段階で評価を求めた。その結果、「達成された」と「ある程度、達成された」と答えた人が96%を占め、「あまり達成されなかった」は4%、「まったく達成されなかった」と答えた人は一人もいなかった。

「あまり達成されなかった」と答えた方の一人はその理由として、「期待していた事柄をあまり見学する機会がなかったから」と答えている。

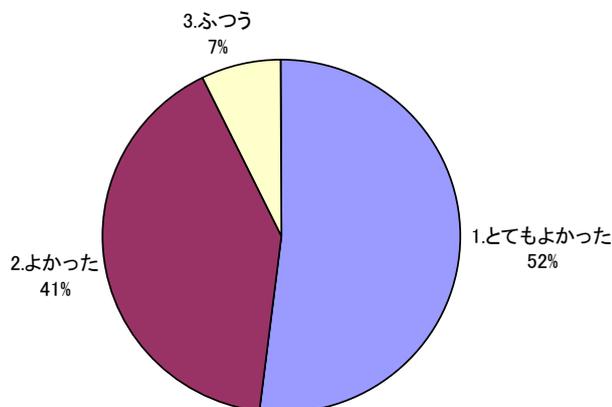
問16. 問6や問7でお答えになった自分の関心ごとは達成されましたか？	集計
1. 達成された	51
2. ある程度、達成された	67
3. あまり達成されなかった	5
4. まったく達成されなかった	0
総計	123



問17. AVCのスタディツアーを5段階で総合的に評価してください。

AVC スタディツアーを総合的で5段階評価してもらったところ、52%が「とてもよかった」、41%が「よかった」、7%が「ふつう」と答え、残りの「よくなかった」「全然よくなかった」と答えた人はいなかった。

問 17. AVC スタディツアーを5段階で総合的に評価してください	集計
1. とてもよかった	66
2. よかった	52
3. ふつう	9
4. よくなかった	0
5. 全然よくなかった	0
総計	127



2.3.4. ヒアリング調査結果

アンケート調査だけでは伝わりきれない部分のデータを補うため、4名の参加者に個別インタビューを行った。

<インフォーマント⁶① N.N.さん（リピーター）>

- ・ インフォーマントの略歴

元保育園に勤務しており、現在は退職している。AVCとは設立当初から関わっており、現在も頻繁にコミットしている。AVCのスタディツアーには過去10回以上参加している。

- ・ スタディツアー参加の動機やきっかけ、望んでいたもの

旅。知らないところに行くことが動機。もともとはヨーロッパを中心に旅行していたが、当時「自然」に関心があり、「環境」をテーマとしたマレーシア・スタディツアーに参加した。

- ・ AVCのスタディツアーを選んだ理由

10年前は他にスタディツアーを実施している団体はほとんどなかった。また、AVCのマレーシア・スタディツアーのテーマ「環境」が自分の関心にぴったりと一致した。

- ・ AVCのスタディツアーを選択する際に不安だった点

AVCに対する不安はなかった。むしろ自分の年齢（当時55歳）でツアーについていくことができるかが不安であった。

- ・ スタディツアー参加前の関心事

関心のあったテーマは自然。それ以外には、いずれどこかロングステイ（長期滞在）するための候補地探し。

- ・ スタディツアー参加後の意識変容

⁶ 情報提供者。

大きく意識変容した。南北問題、社会問題、人権、格差、環境、核、フェアトレードなど様々な分野に強い関心を持つようになった。参加当初はこれらについて全く知識がなかったが、スタディツアーに参加することにより知識としてだけでなくこれらの問題を体感することができた。

- ・ スタディツアー参加後における行動の変化や新たな活動

AVCのボランティアグループに参加し、積極的に関わっている。またAVC以外が主催する様々なセミナーや講演にも出席している。自らもインドの子どもたちの絵の展覧会を開催したり、様々な国でマジックによる交流を実施。普段はLOHAS⁷の生活スタイルを取り入れている。

- ・ スタディツアーの魅力

自分一人ではいけないところにいける。AVC スタッフや現地 NGO スタッフが語学、知識、経験をカバーしてくれる。

<インフォーマント② E.M.さん（元青年海外協力隊員）>

- ・ インフォーマントの略歴

大学生の頃、AVC バングラデシュ・スタディツアーに過去2回参加。その後修士課程に進学し、休学中にJICAの青年海外協力隊員としてバングラデシュへ配属。

- ・ スタディツアー参加の動機やきっかけ、望んでいたもの

国際協力全般に興味があった。メディアから得られる知識だけではなく、実際に現地を見てみたいと思っていた。当時一般の旅行会社は途上国へのツアーをほとんど実施していなかったため、NGOのスタディツアーを選んだ

- ・ AVCのスタディツアーを選んだ理由

プログラムがしっかりしてそうだった。特にバングラデシュ・スタディツアーは現地の大学の講義に参加するなど、他より開発を勉強できる内容であった。また大きなNGOのスタディツアーは現地を「作っている」不安があった。AVCのように規模の小さいNGOが主催するスタディツアーの方が現地の現状をそのまま見ることができると思った。

- ・ スタディツアー参加前の関心事

国際協力全般。現地の現状を知ること。

- ・ スタディツアー参加後の意識変容

未知の世界であった国際協力が身近なものとなった。参加前は何をしたら良いのかわからなかったが、参加後は国際協力に対して恐怖心がなくなり、自分でもできることがあることに気がついた。

- ・ スタディツアー参加後における行動の変化や新たな活動

まずはAVCのベンガル語講座に通い始め、語学講座のメンバーとともに2回目のAVCバングラデシュ・スタディツアーに参加。その後、AVCバングラデシュ・ボランティアグループ「ボンドウーの会」を作り、初代代表を務めた。

- ・ スタディツアーの魅力

人間関係。現地の方々だけでなく、参加メンバーやAVC関係者などと結ばれたこと。ツアー後の

⁷ Lifestyle Of Health And Sustainabilityの略称。健康と環境、持続可能な社会生活を心がける生活スタイルのこと。

行動を AVC が助言や場所の提供などサポートしてくれることも大きな魅力。

<インフォーマント③ S.K. さん（学生）>

・ インフォーマントの略歴

2004 年 3 月に実施したネパール・スタディツアーに参加。参加当時は大学生で、その後修士課程へ進学。

・ スタディツアー参加の動機やきっかけ、望んでいたもの。

大学の卒業論文執筆のために現地を知り、データを入手したかった。しかし一人で行ったことのないネパールを訪れるのに抵抗があったため、スタディツアーへの参加を決めた。

・ AVC のスタディツアーを選んだ理由。

テーマ。卒業論文のテーマ「ネパールのジェンダー」と、その時の AVC ネパール・スタディツアーのテーマ「ネパール女性のしなやかさと、たくましさにふれる旅」が一致していた。

・ AVC のスタディツアーを選択する際に不安だった点。

特になかった。ホームページもあるので安心した。しかし知人の中には「参加費が割高だ」、「AVC は信頼できる団体なのか？」と言った意見もあった。

・ スタディツアー参加前の関心事。

FEDO (AVC のネパール・カウンターパート NGO) やダリッド (低位カースト) の現状把握。データ収集。現地で卒業論文に関する書籍購入。

・ スタディツアー参加中において他の参加者との関係。

ジェンダーに関心のない人の意見や考え方を知ることができた。

・ スタディツアー参加後の意識変容や行動の変化。

スタディツアーへの参加はまず進路に影響した。ジェンダーをテーマに大学院へ進学し、更には開発コンサルタントを目指すようになった。あとダリッド問題を知ることにより、日本の部落問題も知ることができた。

・ スタディツアーの魅力。

個人旅行では成しえないことが経験できる。例えば、現地 NGO の訪問、現地コミュニティーとの交流、など。また、常に通訳が付くので語学の心配がなく現地の方々と話ができる。

<インフォーマント④ M.N. さん（NGO スタッフ）>

・ インフォーマントの略歴

国際協力 NGO のボランティアスタッフをしている時に AVC マレーシア・スタディツアーに参加。その後、ボランティアしていた団体の職員となり、現在に至る。

・ スタディツアー参加の動機やきっかけ、望んでいたもの

マレーシア・スタディツアーのテーマである「環境」や「先住民族」に惹かれた。

・ AVC のスタディツアーを選んだ理由

現地に支部を置かず、カウンターパート NGO との信頼関係を柱にスタディツアーを実施しているところに共感した。

- ・ スタディツアー参加中において他の参加者との関係

あまり記憶にない。他の参加者とは開発支援に対する考え方の違いを感じた。

- ・ スタディツアー参加後の意識変容や行動の変化。

AVC のスタディツアー後に、もともとボランティアスタッフとして関わっていた NGO で正規スタッフとなることを決心した。確かにスタディツアーに参加していなくても、同じ道を歩んでいたかもしれない。しかし、AVC スタディツアーに参加することにより、主体的に正規スタッフの道を選ぶことができた。それまでは「他人の団体」であった就職先が、スタディツアーをきっかけに「自分の団体」であると考えようになった。

- ・ スタディツアーの魅力

メディアを通じてだけでは決して得ることのできない経験ができる。また、個人旅行では決してできない、AVC のコネクションが必要である現地 NGO の活動地訪問やホームステイが体験できる。更に同じ感覚や価値観をもった日本人がコーディネートし、補足説明してくれることもスタディツアーならではの魅力である。

2.4. 分析

以上の調査結果を踏まえた上で、まず AVC がボランティア育成のためのツールとして 10 年間用いてきたスタディツアーが「ボランティア」「国際協力」の担い手を育成するという狙いをどれくらい達成したかを分析・評価する。

ヒアリング調査に協力していただいたインフォーマント①の N. N.さんはスタディツアー参加後、新たにボランティア活動をするようになった参加者のうちの一人だ。彼女は最初に参加したスタディツアーをきっかけにその後も参加を重ね、多くのテーマに関心を持つようになった。そしてその後、自ら AVC をはじめ様々な団体に関わり、ご活躍されている。

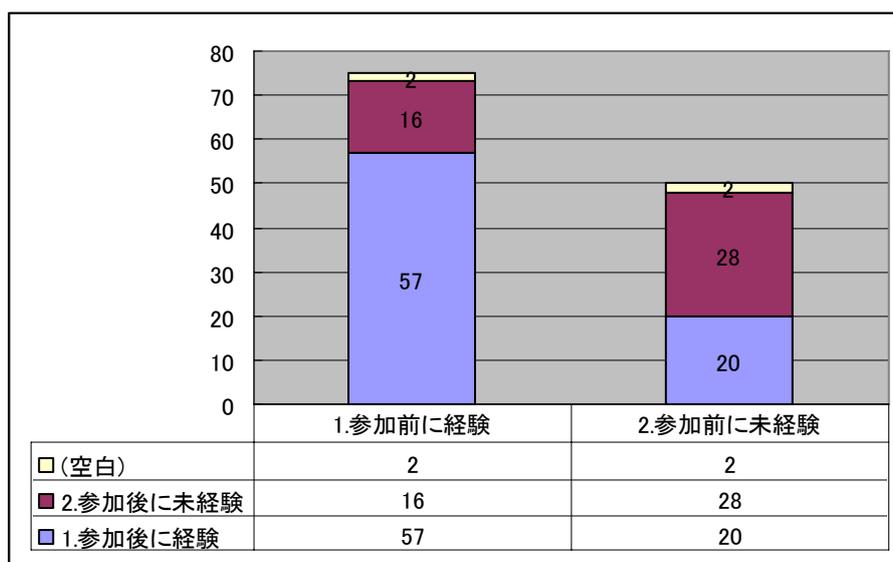
またインフォーマント②の E. M.さんの場合は国際協力に関心あったが、どこか遠い存在に思え、恐怖心を抱いていた。しかしスタディツアーに参加することにより自分にもできる国際協力があることに気がつき、それを身近なものとして捉えるようになった。そして 1 回目のスタディツアーの後には現地の言葉を学び始め、2 回目のスタディツアー後はボランティアグループを結成した。その後、青年海外協力隊に応募し、2 年間の任務を果たした。

この二人は共にスタディツアー参加前は活動していなかったが、スタディツアーを通じて大きく意識や考え方が変わり、そして参加後にそれぞれの方法で行動に移した。そして参加後にその経験を行動に結びつけ、AVC がスタディツアーの狙いとするボランティアや国際協力の担い手育成を達成したケースであると言える。

ではこのようにスタディツアーをきっかけにボランティアや国際協力などの活動をするようになった参加者はどれだけいるのだろうか。アンケート調査問 13 の結果によるとスタディツアー後にボランティアや国際協力に関わっている参加者は 64%で、問 3 のスタディツアー前に関わっている 60%と比べて 4%しか増えていない。これを更に詳しく見るために問 3 と問 13 をクロス集計し、その結果が以下のとおりである。

問3と問13のクロス集計

問3「スタディツアー参加以前からボランティア活動や国際協力活動に携わっていましたか？」と問13「スタディツアー終了後、ボランティア活動や国際協力活動などに関わっていますか？」の結果をクロス集計した。結果、スタディツアー参加前から活動に携わっており、スタディツアー後も引き続き活動されている方は57人（45%）。参加前から活動に携わっていたが、ツアー後は活動していない人が16人（13%）。参加前は活動していないが、ツアー後は携わっている人が20人（16%）。ツアー前も後も活動されていない方28人（22%）。



この結果から、スタディツアー参加後に活動している方のほとんどは、インフォーマント③の S.K. さんやインフォーマント④の M.N. さんのように、元々スタディツアー参加前から活動していた人であることがわかる。そしてスタディツアー参加前の活動経験がなかった参加者50人のうち、インフォーマント①N.N. さんやインフォーマント②E.M. さんのように、ツアー後新たに活動するようになった数は20人（40%）と、半数以下である。

しかしAVCスタッフの荒川共生氏はこの数字を次のように捉える。

「参加者の中で約半数の割合を占める学生は大学卒業後に就職する。彼らのように多くの参加者がスタディツアー経験を直接行動に移す時間がないのは問15の結果にも現れている。そんな中、スタディツアー参加前後でボランティアや国際協力活動する人の割合が4%増えたという数字は決して少なくない。スタディツアー前は何も活動していなかった人のうち、スタディツアー後にボランティア活動などするようになった割合が40%というのはいちばん多いと言える。スタディツアー参加前後でむしろ減っても不思議ではないこの数値が今回の調査によって増えていることは、スタディツアーがその後の活動に影響を与え、行動につながるきっかけ、または大きな動機になっていることの裏づけだと言える。」

また、問18「最後に、AVCスタディツアーについてお考えのことを自由にお書き下さい」に一人の参加者は次のように答えた。

「スタディツアー後、おそらく私のように時間がなく、その後具体的な活動に結びついてい

ない人もいるだろう。でも、この経験は絶対に忘れることのないものであり、そこで見た光景や聞いた話は必ず参加した人の生活や生き方に影響を与えていると思う。今後もぜひ続けてほしい。」

上記を裏付けたのが問 12「スタディツアーを通じて学んだことや体験したことは、その後の生き方や生活に活かされていると感じますか？」のアンケート結果だ。この結果によると 90%以上の参加者が何らかの形で参加後にその経験を活かしていると答えた。更に問 3 と問 13 のクロス集計でスタディツアー参加前も後も活動していないと答えた 28 人についても、そのうち 23 人は問 12 の答えとして何らかの形でスタディツアー経験は活かされていると答えている。つまりスタディツアー参加後にボランティアや国際協力など直接的な活動をしていないにしろ、スタディツアーは 9 割以上の参加者に何らかの影響を与えていると言える。

2.5. 提言

AVC のスタディツアーのねらいの一つは、現地を直接訪ね、自分の足で歩き、その場にある課題を肌で感じ、また当事者と交流し、顔の見えるつながりを作り出すことである。そうしたつながりをその場限りで終わらせず、帰国後も維持しつつ、生活の中で意識し、行動につなげていくことがねらいとしてある。にもかかわらず、問 11「スタディツアーで知り合った人々とツアー後も交流や関わりは続きましたか？」の結果、68%の参加者は現地 NGO や現地コミュニティとの連絡を絶っている。現地との「つながり」がその後途絶えてしまっているのは、スタディツアーを実施している AVC の努力不足だと言える。現地とのつながりを継続するために、参加者個人ができることは限られているので、AVC の果たす役割は大きい。「つながり」を継続するための「仕掛け」を作ることで、帰国後参加者が現地で得た収穫を持ち続け、行動につながっていくことになる考える。

また、「2.4. 分析」ではアンケート調査とヒアリング調査の結果により 90%の参加者に確かな影響を与え、その一部は行動に移していることがわかった。では今後の課題として挙げられるのは、いかにしてその一部を増やすかである。

先に AVC 代表の平田氏が「スタディツアー経験はどこで花咲くかわからない」と述べたよう、スタディツアーを種蒔に例えることができる。AVC スタディツアーでは「影響」「きっかけ」「動機」などの種を参加者に植え付け、9 割はその経験を生活や仕事で活かす形で種を発芽させている。今後の課題は、発芽した芽を育て、開花する参加者をより増やすことだ。上記インフォーマントの 4 人のように、人によっては自ら花咲く。しかし種蒔後に世話することによってより多くの花が咲くように、スタディツアーを企画する団体のフォロー次第ではより多くのボランティアや国際協力に携わる人材を花咲せることができるはずだ。

AVCはスタディツアーの事後研修としてリユニオンと報告書の作成を毎回行っている。また、その地域をスタディツアーで訪れた参加者全員が登録されるメーリングリスト⁸があり、AVCのイベント案内などが流される。問 5 のスタディツアー参加前にボランティアなどの活動をしていない理由として最も多かったのが「機会がなかった」であったのに対して、問 15 の参加後に活動していない理由は「時間がなかった」に変わっていることから、AVCスタディツアーはある程度の帰国後行動に移す「機会」を提

⁸ 電子メールを使って、特定のテーマについての情報を特定のユーザの間で交換するシステム。

供していることは伺える。よって今後はこれら事後研修の充実が求められている。

例えばメーリングリストではイベント案内だけでなく、スタッフが再びその地域をスタディツアーなどで訪問した際の報告や、現地 NGO スタッフの声、現地コミュニティの様子など流すことができる。時間が経つにつれて薄れる当時の思いに刺激を与え、「つながり」の継続を促すことにもなる。

また企画団体は、スタディツアー後に参加者を受入れる体制を作る必要がある。AVC の場合は語学講座や訪問国のボランティアグループがあるが、スタディツアー参加者の参加はあまりいない。AVC は既存の事業の中にもスタディツアー事後フォローをより充実なものにするポテンシャルはある。より積極的にそれらを活用することにより、スタディツアーの可能性を一層広げることが期待できる。

3. 所感

まず、AVC が 10 年間実施してきたスタディツアーが一定の成果を出していると言える結果となったことをうれしく思っている。また、今後の課題があるということは改善の余地があり、人材育成のツールとして更なる可能性を秘めていることとして期待が膨らむ。

残念なのは、調査に費やせた時間の限りと調査員の技量不足などのため、調査結果に含まれる興味深いデータを全てこの報告書で分析できず、十分に活かしきれなかったことである。それでもこの報告書が、スタディツアー事業を実施する一 NGO のケーススタディとして、他団体にとって少しでも参考になれば幸いである。

最後に受入れていただいた AVC の関係者、NGO 専門調査員制度を実施している外務省民間援助支援室の関係者、そしてデータ入力などの作業を手助けしていただいた学生ボランティアの皆様にお礼を申し上げます。

4. 添付資料

4.1. アンケート用紙

AVC スタディツアー アンケート調査

〇〇 〇〇 様

以下の質問にお答え下さい。

(選択問題は該当の番号に○をつけてください。その他を選ばれた場合は自由記述をお願いします。)

- まず、〇〇 〇〇さんが参加された AVC スタディツアーについて確認させていただきます。

xxxx 年 xx 月の △△△△ スタディツアー、でお間違いないでしょうか？

(もし間違いでしたら、お手数ですが下に正しい年月と国名を記載してください)

_____年 _____月 の _____ スタディツアー

- スタディツアー参加以前のことをお伺いします

問 1. スタディツアー参加当時の所属を教えてください。

- | | |
|------------|---------------------------|
| 1. 会社員 | 5. 教員 (小学校・中学校・高校・大学・その他) |
| 2. 自営業 | 6. 学生 (中学・高校・大学・大学院・その他) |
| 3. 公務員 | 7. その他 () |
| 4. NGO/NPO | |

問 2. スタディツアーへ参加する前から AVC と関わりはありましたか？

1. 当時、会員だった
2. 当時、語学教室に通っていた
3. ボランティアしていた
4. イベント・セミナーなどに参加していた
5. AVC とはスタディツアーがはじめての関わり
6. その他 ()

問 3. スタディツアー参加以前からボランティア活動や国際協力活動に携わっていましたか？

1. はい →問 4.
2. いいえ →問 5.

問 4. 問 3.で「1.はい」とお答えになった方は、その活動の具体的な内容をお書きください。

問18. 問3で「2.いいえ」とお答えになった方は、その当時の理由をお答え下さい。

- | | |
|------------|---------------|
| 1. 関心がなかった | 4. 方法がわからなかった |
| 2. 機会がなかった | 5. その他() |
| 3. 時間がなかった | |

問19. スタディツアーに求めていたもの(関心事)は何でしたか?(複数回答可)

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. 国際協力 →問7. | 5. 普通の観光旅行でないこと |
| 2. ツアーが開催される特定の国や地域 | 6. 大学などの研究や調査、論文 |
| 3. 現地の人々との交流 | 7. 自分探し、第2の人生の模索 |
| 4. ホームステイなどの異文化体験 | 8. その他() |

問20. 問6で「1. 国際開発」とお答えになった方のみ、その具体的な内容をお答え下さい。(複数回答可)

- | | |
|--------------|------------|
| 1. 政府や国連の活動 | 8. 自然や環境問題 |
| 2. NGO 活動 | 9. 医療や福祉 |
| 3. ボランティア活動 | 10. 教育 |
| 4. 途上国の現状を把握 | 11. 戦争責任 |
| 5. 平和構築 | 12. 子ども |
| 6. ジェンダー | 13. その他() |
| 7. 人権 | |

■ スタディツアー参加後のことをお伺いします

問21. 現在の所属を教えてください。

- | | |
|------------|---------------------------|
| 1. 会社員 | 5. 教員 (小学校・中学校・高校・大学・その他) |
| 2. 自営業 | 6. 学生 (中学・高校・大学・大学院・その他) |
| 3. 公務員 | 7. その他() |
| 4. NGO/NPO | |

問22. 友人・知人に AVC スタディツアーを勧めたことありますか？

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

問23. ツアー後のリユニオンや写真交換などには参加しましたか？

- | | | |
|-------|--------|-----------------|
| 1. はい | 2. いいえ | 3. リユニオンなどはなかった |
|-------|--------|-----------------|

問24. スタディツアーで知り合った人々とツアー後も交流や関わりは続きましたか？

(例えば、メール・手紙のやり取り、リユニオンやその他イベントへの参加、現地再訪問、など)

AVG と、

1. 今でも頻繁に関わりがある
2. 今でもたまに関わりがある
3. ツアー後、しばらくは関わりがあった
4. ツアー後、まったく関わりがない

現地 NGO と、

1. 今でも頻繁に関わりがある
2. 今でもたまに関わりがある
3. ツアー後、しばらくは関わりがあった
4. ツアー後、まったく関わりがない

他の参加者と、

1. 今でも頻繁に関わりがある
2. 今でもたまに関わりがある
3. ツアー後、しばらくは関わりがあった
4. ツアー後、まったく関わりがない

現地コミュニティと、

1. 今でも頻繁に関わりがある
2. 今でもたまに関わりがある
3. ツアー後、しばらくは関わりがあった
4. ツアー後、まったく関わりがない

問25. スタディツアーを通じて学んだことや体験したことは、その後の生き方や生活に活かされていると感じますか？該当するもの全てお選び、お答えください。

1. 仕事に活かされている。
(具体的に: _____)
2. 学業に活かされている。
(具体的に: _____)
3. 進路に活かされている。(例: 専攻や就職先に影響した)
(具体的に: _____)
4. 生活に活かされている。
(具体的に: _____)
5. その他の方面に活かされている。
(具体的に: _____)
6. 特に活かされていない。

問26. スタディツアー終了後、ボランティア活動や国際協力活動などに関わっていますか？

1. はい → 問 14.
2. いいえ → 問 15.

問27. 問 13.で「1.はい」とお答えになった方は、その活動の具体的な内容をお書きください。

問28. 問 13.で「2.いいえ」とお答えになった方は、その理由をお答え下さい。

1. 関心がない
2. 機会がない
3. 時間がない
4. 方法がわからない
5. その他(_____)

5. 参考文献

5.1. スタディツアー関連書籍

	筆者	タイトル	副題	発行日	発行
1	開発教育協議会	『開発教育』 No. 11	スタディツアーを考える	1987年	開発教育協議会
2	田中 博 (スタディツアー研究会代表)	スタディツアーにおける現地受入側インパクトの考察		2000年8月	スタディツアー研究会
3	スタディツアー研究会	スタディツアー旅券	～スタディツアー・ワークキャンプのてびき～	2002年6月	スタディツアー研究会
4	開発教育協議会	『開発教育』 No. 44	特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
5	JANIC	『国際協力 NGO ディレクトリー 2004』		2004年3月31日	JANIC
6	関西国際交流団体協議会	『 InterPeople Directory』		2003年	関西国際交流団体協議会
7	Jリサーチ	J-eyes vol.5 新・地球発見旅行	エコツアー スタディツアー ワークキャンプ	2002年8月1日	福田 富与 有限会社 Jリサーチ出版
8	関西 NGO 協議会	関西発スタディツアーハンドブック		2003年11月1日	特定非営利活動法人 関西 NGO 協議会
9	関西 NGO 協議会	関西発スタディツアーハンドブック	2004年春(データ編)	2004年6月6日	特定非営利活動法人 関西 NGO 協議会
10	関西 NGO 協議会	関西発スタディツアーハンドブック	2004年秋(ハンドブック編+データ編)	2004年10月31日	特定非営利活動法人 関西 NGO 協議会
11	野中 春樹	生きる力を育てる修学旅行	いのちの森サラワクで学ぶ	2004年5月30日	コモンズ
12	市原 芳夫	『スタディ・ツアーのすすめ』		2004年2月20日	岩波ジュニア新書 461

5.2. スタディツアー関連論文

	筆者	論文タイトル	雑誌タイトル	発行日	発行
1	竹林 友里	卒業論文 「開発教育としてのスタディツアー」	1998年度 卒業論文	1999年1月20日	Osaka University of Foreign Studies

2	田中 治彦	「スタディツアーの特集にあたって」	『開発教育』 No. 44 特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
3	田中 博	「スタディツアーの現状と課題」	『開発教育』 No. 44 特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
4	山中 速人	「オルタナティブ・ツーリズムとしてのスタディツアー」	『開発教育』 No. 44 特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
5	安村 克己	「観光と教育－観光とスタディ・ツアーの関係」	『開発教育』 No. 44 特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
6	座談会： 小林 和夫 長畑 誠 米山 敏裕 田中 治彦	「スタディツアーをめぐって－現状と課題」	『開発教育』 No. 44 特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
7	荒川 共生	「サラワク州への修学旅行－学校と NGO との連携」	『開発教育』 No. 44 特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
8	柏村 みね子	「ネパールの風と人々と「私」に出会う旅」	『開発教育』 No. 44 特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
9	越田 清和	「自分と社会のつながりを見つめなおす旅」	『開発教育』 No. 44 特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
10	門 敦之	「スタディツアー引率者に求められる「参加型」の視点」	『開発教育』 No. 44 特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
11	出口 雅子	「スタディツアーって何？」	『開発教育』 No. 44 特集スタディツアー	2001年8月1日	開発教育協議会
12	磯野 昌子	スタディツアーは「自分探し」の旅？	『国際教育研究所報』 Vol. 13		
13	田中 博	48 スタディツアー	『開発教育キーワード51』	2002年3月20日	開発教育協議会
14	田中 洋子	今度は「学びの旅」へ出てみないか	J-eyes Vol. 5	2002年8月1日	福田 富与 有限会社 Jリサーチ出版
15	平田 哲	国際協力 NGO のスタディツアーが目指すもの	関西発スタディツアー・ハンドブック	2003年11月1日	関西 NGO 協議会